



筑波大学のスポーツ風土を考える —スポーツを通じた地域貢献—

長谷川悦示
体育科学系講師

筑波大学生のスポーツクラブの活躍

今年度における筑波大学のスポーツクラブの活躍は近年のなかでも目に見張るものがある。バレーボール男子が大学選手権6連覇を達成し、バレーボール女子も15年ぶりに選手権制覇でアベック優勝を果たした。同様に剣道の男女が団体に大学選手権アベック優勝を飾った。陸上部について女子は総合優勝13連覇、男子準優勝のすばらしい成績を残した。またテレビ中継もされた大阪を舞台に行われた大学女子駅伝では、堂々の2年連続優勝を果たした。ハンドボール女子は選手権大会ほか4冠達成。多くの「リーガー」を輩出しているサッカー部が22年ぶりに大学選手権制覇。バスケットボール男子が24年ぶりに関東リーグ制覇。これらの団体競技以外にも、韓国釜山で開かれたアジア大会では、柔道や水泳などの種目において筑波大学生の活躍はすばしかった。

この活躍を知って筑波大学の一員として、素直にうれしく、彼らに対して心からのエールを送った学生や教職員も少なくないであろう。しかし、大学内の反応は、それほど大したことではない、熱気がない、むしろひややか、と感じるのは私だけであろうか。実際、私が担当している共通体育を受講している体育専門学群以外の学生に尋ねても、そうした情報をほとんど知らなかった。体育専門学生であったとしても、自分の所属以外の種目について、どれほどの情報をもっているのか、それもあやしいものである。

もし、これが都内の某有名大学であろうものなら、自校の健闘に対して大学キャンパス全体が祝賀ムードや一種のお祭りの熱気で充満したことに違いない。

観客を収容できない筑波大学の体育・スポーツ施設

体育専門学群は、高橋学群長を代表に、つくば市からの受託研究で、今後10年間におけるつくば市のスポーツ振興の在り方を定める「つくば市スポーツ振興基本計画」の作成を進めている。私もその協力者の一人として、つくば市の方と懇談したときに、今年度の筑波大学スポーツクラブの活躍が話題となったことがある。市の方からは、「筑波大学のスポーツクラブはとても活躍されていますね。市民に呼びかけて試合や大会の観戦を企画したいのですが、大学内のどこで行われているのですか?」と尋ねられた。

しかし、私は次のように言うしかなかった。「残念ながら、大学では試合や大会がほとんど行われていません。」「また、来て頂いても市民の皆さんが応援したり観戦したりする席が体育館や屋外のグラウンドには整っていないのです。」「ほとんどの公式戦を都内の観客席を備えた施設で行われていることや、筑波大学の体育・スポーツ施設の実状を聞いた市の方はとても驚いた様子だった。

体育・スポーツ施設に観客席がないのは、筑波大学に限ったことではない。実際、日本の公立学校の体育施設には、

まったくといってよいほど観客席というものがない。公立の小学校、中学校、高等学校の体育館、運動場にそれらしい観客用の仕掛けやスペースがないように、国公立大学にもその装備はない。したがって、大きな大会の公式試合なるものは、公共の体育・スポーツ施設で行われることになってしまう。

このことは日本にいれば、至極当然のことであり、疑うこともないのだが、スポーツ文化が成熟した諸外国をみると事情は一変する。体育教師教育に関する調査のためにアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドを訪問したときに、私はこのことを強く認識した。

昨年、訪問したネバダ州立大学ラスベガス校においては、体育館、屋内プール、ダンス場のそれぞれごとに観客席が備わっていた。体育館の場合、収納式の席で、週末には大会や地域の高校の試合で活用されるのである。近隣の高校を視察しても、観客スタンドのあるテニスコート、野球場、陸上競技場、フットボール場など、みごとなスタジアムを備えていた。これがアメリカの標準なのかと感心させられた。

オーストラリアのクイーンズランド大学を二度目に訪れたときは、ちょうど新しい体育館を建設しているときであっ

た。対応してくれたマクドナルド先生に観客席はあるのかと尋ねると、「もちろん」「数千人が収容できる」と答えてくれた。アメリカ、オーストラリアといったスポーツが日常生活にしっかり根付いている国では、体育・スポーツ施設に観客席を設けるのが当然なのだ。

ニュージーランド訪問では、施設についても一つ強烈に印象に残ったことがある。クライストチャーチ教育大学の体育館で行われた模擬授業の様子を視察して気づいたのだが、体育館のフロアの片面には、椅子やボードが置かれていた。授業前後での計画・反省のためのものである。また上から授業全体の様子が観察・記録できるように回廊が備わっていた（日本でいえば高い位置の窓を開閉するために付いている回廊を大きくしたものの）。筑波大学でも近年、体育教師教育カリキュラムの中に模擬授業を積極的に取り入れているが、施設は各種目ごとにあるものの、クライストチャーチ教育大学と比較すると模擬授業にはとても使いづらい構造になっている。

地域に愛されるスポーツコミュニティ

こうした施設の構造上の違いは、私たち日本人のもつスポーツ観の違いをよく反映していると思われる。日本の学校体

育施設に観る・観せるための装備がないことは、日本のスポーツ教育がもっぱら「する・させるスポーツ」にしか力を注いでこなかったことのあらわれだろう。そのため、わが国においてトップレベルのスポーツクラブを有する筑波大学であっても、体育・スポーツ施設はなによりも選手の修練場であることが優先されてしまい、スポーツ文化に含まれている、観る場所、集う場所としてのコンセプトが脱落してしまっているのである。

アメリカやオーストラリアの大学では、地域住民がスポーツ施設を利用できるような仕組みを備えている大学が多い。視察先の大学でも、学生だけでなく、住民や教職員に同じように利用カードを発行し、授業以外はトレーニングジムやプールなどのスポーツ施設を一般開放していた。またアメリカの大学では、自前のスタジアムで開催するアメリカンフットボールの試合日は、地域住民がこぞって応援に駆けつけお祭り騒ぎをしているという。

このようにスポーツ文化の先進国の大学は、大学の施設を広く地域住民に開放することで地域と接し、またその交流を基盤にして大学のスポーツクラブは地域のシンボルとなり、地域に愛されるスポーツコミュニティを形成しているの

ある。

日本におけるスポーツ科学とスポーツ実践の両面で最前線にある筑波大学には、こうした地域住民に開放可能な体育・スポーツ施設の整備・利用の在り方、具体的には観客席やクラブハウス、スポーツジムなどのアメニティの充実と活用が大きな責務として課せられていると考えられる。

筑波大学のスポーツ風土

私は筑波大学大学院から準研究員をしていた10年間、ツクバリアンズという筑波大学をホームグラウンドとするラグビーのクラブチームに所属していた。このクラブは、体育研究科の大学院生の他に、ラグビー経験のある地域の有志が集まったもので、県の国体代表になるほどの実力チームである。また小学生からのジュニアチームの指導もメンバーが行っている。シーズン中は週水、土の2回の練習と日曜の試合がルーチンで、練習では、時に筑波大学学生チームと交じり、練習試合もしている。

地域交流として春に開催されるラグビーフェスティバルでは、メンバー全員がラグビー部学生とともに運営に携わってきた。年の納会などは、ジュニアとその保護者そしてシニアチームのメンバー

だけでなく、大学のラグビーチームも合同で開催したので、幅の広い年齢層が時と場所を同じくすることができた。当時のメンバーには、高エネルギー研究所などの教授や研究員、筑波大学の教職員もいた。その中にはとともにスクラムを組んだ国際政治学者の故秋野 豊先生もいらっしやった。ここには地域のいろいろな人と人が触れ合うことができるスポーツを介したすばらしいコミュニティが存在していた。その一員としての経験できたことは、私にとってのかけがえのない財産となっている。

日本の国立大学が独立行政法人化をむかえ、その役割と使命が大きくと問われる時代が訪れようとしている。COEをめざす筑波大学にはその一面で地域貢献にも大きな期待がかけられている。その一つとしてスポーツを通じた地域貢献は、設立以来の歴史の中で着実につづけられており、今後さらに発展する可能性がある分野である。

先述したつくば市スポーツ振興基本計画に関わって、筑波大学関係者がこれまで実践してきたスポーツ支援・指導活動やボランティア活動を統括し一層発展させようとする組織の創設が構想されている。この構想が実現することで、筑波大

学と地域つくば市民とのスポーツを介した交流がさまざまな分野に波及することを期待したい。そして、筑波大学のスポーツクラブの活動や活躍を、大学関係者だけでなく、地域市民とともに、互い

に支え合え、喜び合えるようなスポーツ風土が、将来きっと培われると信じた

(はせがわえつし 体育科教育学)

